

永井路子の描く鎌倉時代 史伝文学の傑作『つわものの賦』

巻^{ちまた}では大河ドラマ「義経」が話題になっています。鴨越^{ひよどりこ}の逆落とし、壇ノ浦^{はつろ}の八艘飛びなど、平家を打倒した天才戦術家、その天才ゆえに兄・頼朝にねたまれ、滅ぼされざるをえなかった悲劇のヒーロー...こんなふう^{ふう}に語られる源義経は、日本史における最も人気のあるアイドルの一人であることは間違いないでしょう。そういえば、義経役を演じるのは、必ずといっていいほど美男の俳優です。

そんな義経を「反っ歯の小男」と、敢えて日本中からブーイングを浴びせられるような姿で描いた作家をご存じでしょうか。たしかな史料に忠実に基づき、常に歴史に新しい見方を唱えてきた歴史小説家。皆さまよくご存じの永井路子氏です。

ところで「反っ歯の小男」は、かの「平家物語」に描かれている義経像に基づいています。これは直木賞受賞作の『炎環』の中に出てくる描写ですが、永井路子といえば鎌倉時代といわれるほど、『炎環』をはじめ『北条政子』『相模のものふたち』といった鎌倉時代を描いた作品は、永井文学の中でもひとときわ輝いているといってもいいかもしれません。

そんな永井路子が描く鎌倉時代の総決算ともいえる作品が『つわものの賦』です。この作品、小説とはちょっと違った趣があります。そのことは著者自身が「あとがき」で述べています。

「...そのことを書くとしたら、小説という形式ではあり得ないだろうと思った。それではどういう形にすべきを考えはじめてから四、五年は経つ。いまこうして書きあげたものは小説ではない。しかし歴史書のつもりはさらさない。しいて祖形を求めるならば、明治以降数人の文筆家が歴史上の個人について書いた史伝、評伝がそれにあたるかも知れない。これら専門の歴史家以外の立場から書かれた作品が、一人の人間について述べているのに対し、私は歴史そのものを対象としているということになるか」と。

永井文学を特徴づける手法の一つに「史伝文学」があげられます。女流文学賞を受賞した『氷輪』、吉川英治文学賞受賞作『雲と風と』がその代表作といえます

ですが、この『つわものの賦』を史伝文学の傑作の一つにあげる評論家は少なくありません。まさに、史実に忠実に、しかも通説に惑わされずに歴史を描き直してきた永井路子ならではの作品といえましょう。

今後の大河ドラマがどう展開していくか、それはそれで興味をそそられるところではありますが、『つわものの賦』をひもとして、永井路子の視点から義経と彼を取り巻く人々、そして鎌倉時代というものを味わい直してみるのもまた一興ではないでしょうか。

* 本欄は、今回をもって休載となります。
長期にわたりご愛読いただきありがとうございました。



永井路子氏と『つわものの賦』の肉筆原稿・単行本・文庫本